

“ボーダー”と“クロスボーダー”を めぐるいくつかの議論

Several Discussions on Border and Cross-border

高畑 由起夫

Yukio Takahata

I review the history of modern taxonomy of things, life, humans, ethnic groups, and cultures. Based on such a classification, we have built modern science, society, states, etc. On the other hand, classification often has caused prejudice, discrimination, and disputes. In this note, I try to discuss how we can bridge overcome many borders surrounding ourselves.

キーワード：ボーダー、クロスボーダー、分類、系統、百科全書派、民族、国家

Key Words : Border, Cross-border, Classification, System, Encyclopedists, Ethnic-group, State

はじめに

“ボーダー”はいかにして生まれたのか？

“クロスボーダー”という概念をめぐって、たとえば国際的な人の流れやエスニック・コミュニティ、ユニバーサルデザイン等多岐にわたるイメージが浮かぶだろう。それを一つにまとめれば、異質で多様な者たちの、(社会にあらかじめ仕組まれている)枠組み=ボーダーを超えた触れあいということになるのかもしれない。

しかし、“ボーダー”とはそもそも何か？ 何のためにできたのか？ こうした疑問にとらわれると、私がつい思い浮かべてしまうのは、いささか唐突かもしれないが、次にあげる魯迅の文章である。

「希望というものはもともと、いわゆる有ともいえないし、いわゆる無ともいえないのだと。それはちょうど地上の路のようなものだ。実際は地上にはもともと、路というものはなかったのを、歩く人が多くなって、そこが路になったのである

(『故郷』増田渉訳、角川文庫版より)」

この文章で評されている“路”のように、“ボーダー”は、もともと存在していなかったものだったのに、いつの頃からか生まれたものなのだろうか？ そうだとすれば、“ボーダー”にもひとしなみに“生まれる”だけの理由がある(あった)はずだろう。すると、さらに次の疑問が浮かぶ。その理由とは何か？ また、仮に理由があったとしても、ボーダーは我々の社会にとって、なくてはならないものなのか？

たやすく答えられそうなものもないわけでもない。たとえば空間的な“境”である。ホオジロやテナガザルのように、生きるために自他の間に境をめぐらし、“なわばり”をかまえる種も多い。そうした姿に家々の境から国境までも包含する“ボーダー”の萌芽を見ることもできる。つまり、ボーダーはヒトの社会が成立する以前からもともと存在していたかもしれない。

もとより、ボーダーはそんな単純な問題ではない。何よりも、我々自身の心を他者と隔てる様々

な“ボーダー”=“国境”、“民族・文化”、“階級”、“発育段階”等がどんな経緯でひかれたのか？ たとえば、“オリエンタル”という言葉、当の“オリエンタルの人たち”が使うだけで西欧中心主義の思考にからみとられる悲哀こそE・サイードの『オリエンタリズム』の主題にほかならない。また、近代ヨーロッパ社会は“おとな”と“こども”の違いにめざめたわけだが(アリエス、1980)、そのボーダーをめぐる一種の苦みを込めたストレンジ・テイストなファンタジーがJ・M・バリーの“ピーターパン”であり、“年齢”という絶対的なボーダーにとまどいを隠せないのが“少年法”をめぐる議論だろう。さらに、国境をはじめとする社会的境界が人間集団のアイデンティティの象徴でもある(パートン、2001)。

さて、本章ではこれから、今や世界を覆い尽くしているデ・ファクトなグローバリズムから眼をそらすことなく、近代科学／社会の展開のなかで分類、命名、ラベル付けがどのように彼我の差を、そして我々自身の心を“ボーダー”で区切っていたかについて考えてみたい。

I. 分けることと名を付けること —アンシクロペディストたちの夢

I-1. 命名と分類、そして標準化

事物の認識とはまず、自己と他者との区別に始まる。周囲の事物を選び分け、命名する欲望は、どんな“未開人”にも共有されている(レヴィ＝ストロース、1976)。この欲望はアフリカの熱帯雨林に生きる狩猟採集民ムプティ・ピグミーの老人でも(伊谷、1996)、アルゼンチンの小説家ボルヘスが想像する中国の百科事典でも(フーコー、1976)、変わらない。しかし、何と言っても特筆すべき試みは、すべてを分類・系統付けするアンシクロペディスト(百科全書派)たちの夢だろう。

17世紀の近世フランスで、知識人たちは「知識

は力であることを悟り、知識の世界を測量してその征服に乗り出した」(ダントン、1986)。その最終的な戦略目標は「知識にはっきりとした形をあたえて、それを聖職者から奪い、啓蒙主義にかかわる知識人の手に」委ねることにほかならない。今日、近代科学は世界にかかわる全認識を支配しているが、その手始めは「既知と未知の間に」「世界地図を書いて世界の征服を企て」た、デイドロやダランベールたちの試みなのである。さらに“命名”には“標準化”が好ましい。こうして化学では元素記号等が、生物学ではC・リンネが始めた“学名”等が普及したのである。

その一方で、アンシクロペディストには思いもよらぬ悪夢だが、こうした試みはしばしばあからさまで無自覚な差別を生み出した。まず、“標準化されていない者／物”への軽蔑。命名・分類にともなう近代科学が賞揚される一方、不確かでありまいな民族科学は蔑まれる。人類学者たちが“野生の思考(レヴィ＝ストロース、1976)”を称揚したとしても、たいていは近代科学による“再発見／再評価”が必要なのだ。さらに、自分たちが創り出した体系から“はみ出してしまう”グレーゾーンへの嫌悪と無視が首をもたげてくるのである。

I-2. “系統”と“進化”

デイドロ自身が意識していたように、近代での分類は単純な“分別”ではない。「全体を共通性で大きく分け、分けたものをさらにまた共通性に従って細分し、これ以上分けることのできない個体の一つ手前まで順次分けていって段階付け、体系化することをいう」(坂本、1985)。しかし、これは簡単に口にするほどたやすいことではない。デイドロも『百科全書趣意書』で「むつかしいのはその形式と構成である。多量の素材を(略)まとまった一つの全体に仕立て上げなければならない」と記している(ダントン、1986)。このような努力のはてに、彼らは人間知識を一つの「知識

の系統樹」にまとめ上げたのだ。

その系統に時間軸を意識する時、“進化”の概念が顔をのぞかせる。進化は、生物に限った現象ではなく、太陽系であれ、社会であれ、一方向的な時間の流れにおいて不可逆的に変化が進む現象である。その一方で、進化のイメージはまたも“偏見”を生み出す。たとえば、“遅れている”とラベル付けされた者たちは、ラベル自体が評価となる。こうした考え方の典型が“社会ダーウィニズム”にほかならず、確たる保証もなしに“進歩”、“進化”、“発展”等に好意的な価値観をふりまいている。

デイドロ自身は、1772年に著した『ブーガンヴィル航海記補遺』でこうした構造に“高貴な野蛮人”というアンチ・テーゼを唱えている。それ以来、ヨーロッパ系文化は“未開”に対して、“高貴さ”と“野蛮”という二つの印象の間を揺れ動いてきた。この点について、もっとも的を射た論評はレヴィ＝ストロース(1976)の“熱い社会”と“冷たい社会”だろう。後者の社会では、“熱い社会”の成立自体を避けるため、人々の間に境＝ボーダーを築く企てを放棄してきたのだ。それにもかかわらず、ヨーロッパという“熱い社会”が大航海時代以降、パワーとデ・ファクト・スタンダードで“冷たい社会”を飲み込んでしまったのである。

I-3. 命名は権力にほかならない

現在、命名と分類はデイドロたちの思惑を乗り越え、認識の世界を支配するにいたった。つまるところ、命名とラベル付けは“力の行使”にほかならない(ダントン、1986)。ジャーナリストの本多勝一(1967)はカナダ・エスキモーが住む地で、英語で書かれた地図を開いた時にそれに気づく。

「地図を頼りに歩くうち、私はだんだん腹がたってきた。・・・すぐ南に“ケイブ・ジャーメン”という岬がある。・・・ところが、かれらにはケイブ・ジャーメンがわからない。・・・ここは“アナンギアクジュ”だという。・・・エスキモーはエスキ

モーで、先祖伝来の地名を使っているのだ。従って、かれらのいう場所を地図でさがしても、絶対にわからない。・・・たとえば日本を占領した外国が、京都をニューロンドンに]したようなものである。もちろん、これは他人事ではない。この文章はさらに「シンガポールの昭南島、チョモロンマのエベレストもこれに類する。現地人を人間と見ていないのである」と続くのである。

こうした話題は止めどもないものだが、人類学でとくに採りあげられる問題は“自称”と“他称”である。上記の本多の文では“エスキモー”を使っているが、これは「生肉を食う連中」という意味のネイティブ・アメリカン(これも他称の“インディアン”を避ける中立的な呼称)からの蔑称まがいの他称である。“エスキモー”自身の自称は“イヌック”で、現在では“イヌイト”と言い換えるのがふつうだ。もっとも、本多もこのことは承知の上で、彼ら自身が平気で「エスキモー」と使うから、この名称を用いたと断っている。

II. 分ける手段とその精神

II-1. 我々はどうやってものごとを分けるのか?

それでは、“ボーダー”を引く作業、つまりものごとを区別する手口に話を進めよう。これは自然科学でも結構難しい。たとえば、分類基準が客観的か、恣意的か? 神ならぬ我々にとって“客観的な基準”など手にすることができるのだろうか? 分類学の鼻祖であるリンネは、植物を花(生殖器官)で分類した。しかし、こうした基準に恣意性が紛れ込むことはないのだろうか? 分類・命名に関する標準化＝“グローバル・スタンダード”はいつも正しいのだろうか?

M・フーコー(1974)は「私たちがものごとを整理するやりかたがいかに恣意的」かを指摘する。その上で、何より肝心なのは、どんな恣意的な分類であれ、我々がそのボーダーを固守しようとす

ることにほかならない。それは、「あらゆる社会的行為は分類図式の定める境界線の内側で生起」すべきだからだ(ダントン、1986)。こうして分類は人や物の周りにボーダーをはりめぐらし、分節化の上でラベルを貼る。

その一方で、近代科学とは常に“正しいこと”、“自明であること”が要求されてきた。したがって、どうやれば(自分たちのアイデンティティを支える)“分類”が「正しい根拠にもとづくものだ」と納得できるか、大きな課題となってしまう。それでは、どんなやり口が許されるのだろうか？ あえて単純に言い切れば、“普遍性”と“特殊性”の弁別であろう(フーコー、1974)。どんな分野でも、分類の際、“普遍性(一般性)がある特徴”と“特殊性(個別性)を示す特徴”を見比べ、“類似=相似”によってボーダーを引く。こうして類似の認識は同時に差異を認識させる手段となる。その差異がデジタル的であるほど安心する一方で、差異があいまいでアナログ的なほど不安に誘われる。

デジタルな差とは何か？ 数量的な資料を紹介しよう。ムブティの人たちの身長は130~160cmほどの幅に、中央値は145~150cmほどである(Lewontin, 1995)。この値を東アフリカの遊牧民ディンカの変異幅である160~200cm、中央値180~185cmと比較すれば、歴然とした差(デジタル的差)が認められる。さらにこれをチンパンジー等と比べれば種間の差=種間変異があらわれる。そこに“種”が自ずと浮かびあがる(はずである)。

こうしたアナログ資料の相対的/曖昧な差に手を焼いてか、分類学では最近、遺伝子のDNA鎖の比較が流行っている。“分子時計”という手法で、遺伝情報であるDNA鎖について、種分化した年代が古いほど鎖の差が大きいと仮定する。つまり、遺伝情報=デジタル情報の違いをニュートン力学的時間に換算(=時計として使う)するのである。

最後に付け加えなければならないが、実は、“分類”には“ごみ箱”がつきものである。哺乳類を例

にあげると、食虫目(モグラやハリネズミ等)という分類群がそれにあたるが、素直に分類できないあやふやな存在をごみ箱におち込むことで、体系そのものは涼しい顔をするためでもある。言いかえれば、体系/体制は例外が嫌いであり、秩序に合わないものの処理に“ごみ箱”を使うのだ。これは、体系からはみでた存在が「私たちの概念が設けている境界(=ボーダー)を侵犯」して、「私たちに慄然とさせ、また魅惑する」のを事前にふせぐためでもある(ダントン、1986)。先にあげた東アフリカのインド系住民等の人々はもとより、日本でも、アイヌや琉球列島の人々の歴史やアイデンティティはつねに無視がちであったことを忘れてはなるまい(比屋根、2003; 岩崎、2003)。

II-2. ボーダー/カテゴリーの分け方: 3つの例

本来はアナログ的かもしれない変化/変異を、カテゴリーというデジタル的な枠で読み替え、そのカテゴリーに命名して、ラベル付けすることで社会的な枠に組み入れる。近代社会は、こうした作業を組織的にそして大規模におこなってきた。それでは、その作業をいくつか見てみたい。

(1)“人種”：結論から言えば、純粋な“人種”も“民族”も存在せず、どちらも“統計的”な概念に過ぎない。実際、これまで述べてきた“分類学的手法”が“人種”にも適用可能なのか、見てみよう。たとえば、“ジプシー”の研究者であるA・フレーザー(2002)によれば、この“民族”は長年の間に混血を繰り返し、単一の遺伝的集団とは認めがたい。当然だが、人間集団は静的な存在ではないである。絶え間ない移動と通婚で、(かつてのオーストラリア先住民のように数万年間隔離されない限り)“純粋の人種”は存在し得るものではない。

またこうも言えるかもしれない。日本とポルトガルという大陸の東西の端にいる2集団をじかに比べてみれば、両者をデジタル的に分ける遺伝的

指標も存在するだろう。しかし、両国の間に、たとえば日本からは朝鮮半島、中国東北部、モンゴルと地域を順に並べていけば、遺伝的な差異がアナログ的に移行していくことは容易に想像がつく。この緩やかな変異のどこにボーダーを引けば、よく使われる“モンゴロイド(黄色人種)”と“コーカソイド(白色人種)”が区分できるのだろうか。とはいえ、以上は自然科学の視点に過ぎない。たぶん一番問題なのは、ほんのわずかな差異であっても見つけて、誇張し、自他の差を広げよう(=ボーダーをひこう)とする我々の性癖ではなからうか？

(2)性：ヒトの“性”は“男性”と“女性”にデジタル的に二分される。しかしながら、統計的に少数だろうと、“性”に様々な形態があり、個人によって“性”が持つ意味が違うかもしれないことが、最近、性同一性障害やゲイ・カルチャー等によって明らかにされてきた。

ヒト以外の生物でも、性はあまりにも多様である。植物の花をとりあげれば、①一つの花におしべとめしべを持つ両性花を咲かせる種もいれば、②同じ個体に雄花と雌花を咲かせる種もあり、③雌花だけが咲く雌株と雄花だけが咲く雄株が存在する種や、④一生の間に無性、雄性、雌性の間を性転換する種さえ認められる。動物でも、①雌雄同体の種(カタツムリ、ミミズ等)もいれば、②遺伝的に雌雄が決定されている種や③非遺伝的要因(孵卵時の気温)で性が決定されている種(ミシシッピーワニ等)、さらには④性転換する種等が存在する。もちろん、“性”抜きに増殖する生物も珍しいものではない。クローン家畜には眉をひそめる人でも、遺伝的に結実能力を失って挿し芽で増えるバナナについて、それがクローンであるからという理由で手をつけない者はいないだろう。

ヒトでは遺伝的に生物学的な性が決定されるが、染色体の変異(ターナー症候群等)、あるいは

器質的な原因がなくとも自らの生物学的性に同一視できない性同一性障害、さらには同性愛など、様々な性のあり方がある。問題は、こうした現象をそのまま受け入れるか、それとも己の価値観にそってボーダーを引き、周辺的な存在を排除するか、という点なのである。そして、最後に、ヒトがなぜ自らと違う者、あいまいな者、見知らぬ者を排除しようとするのか、基本的な疑問が残ってしまう。

(3)健康と病気：最後の例は、“健康”と“病”の境である。世界保健機構(WHO)憲章前文では、「たんに病気や虚弱ではないということだけではなく、身体的・精神的・社会的に完全に具合のいい状態」とされている。それでは、“老い”は病だろうか？ また、同様の意味で、“不妊症”は病だろうか？ こうした簡単な問いでも、よく考えるとやはりグレーゾーンに気づく。さらに、ある種の病気は社会的な烙印をおされる。古くはハンセン氏病がそうであったように、生物学的にはたんにある症状を指す言葉のはずなのに、そこに社会的な意味が付与され、ラベル付けされる。そしてそれが人々の幸、不幸を決めていくのである。

このように自然科学の立場からみれば、分類とは“真実”を理解するために立てられた仮説に過ぎない。そこでは当然、“作業仮説”で掬いあげられない“ごみ箱”行きのものもあるし、いったん定まった分類もあっけなく否定されたりする。つまり、新しい事実が判明すればそのつど更新されていくべきものに過ぎない。しかし、我々の社会に現実に進行したものはどうであろう、むしろ、逆ではなかつただろうか？ 人種、民族、国家、宗教、それぞれのレベルで、ボーダーは仮説ではなく“現実”と見なされ、その“現実”で烙印をおされた(ラベリングされた)者たちが次々に“分類”されていく。そうした“ボーダー”がもたらす“負のフィードバック”について、アフリカのフィール

ドで感じたことをいくつか書いてみたい。

Ⅲ. “分けられた” 人たち

Ⅲ-1. 国境とは何で決まるのか? —アフリカの光景から

もう20年以上前になるが、私はタンザニア共和国西部のマハレ山塊国立公園で3年ばかりを過ごした。この公園はタンガニイカ湖に面しているが、湖の中央にタンザニアとブルンディ、ザイール(現コンゴ)、ザンビアを分ける国境が走っている。とは言いながら、この“ボーダー”は1885年のベルリン会議でドイツ、ベルギー、イギリスの間で分けられものに過ぎない。そして、それ以来、ボーダーが動いたことはない。下手に動かせば、アフリカの脆弱な新興国家は崩壊しかねないのである(宮本・松田、1997)。現実にも、1960年代の独立ラッシュ後、いったん認定された国家が分割された(=ボーダーが引き直された)例は、エリトリアがエチオピアから独立したケースだけである。

その一方で、人々の暮らしは昔も今も変わらない。カヌーを漕いで湖を横断することなどわけもない。パスポートを持つ者などいるはずもないから、すべて密出入国にほかならず、いくばくかの商品等を持参すれば密輸である。1885年にベルリンで締結された条約にもとづけば、彼らの動きは立派な不法行為でもあるのだ。一方、往来者たちの間で男女が結ばれることもある。知り合いのタンザニア人男性がザイール人女性と結婚した時、「あの二人の子供は、いったいどちらの国籍になるのだね」と尋ねると、「病院で産んだら出生証明書をくれるから、最近では病院で産むことが多いけど、タンザニアの病院で産めばタンザニア人に、ザイールで産めばザイール人になる」というのんびりした答えで、妙に納得したものだ。両国とも戸籍などなく、人々は近年まで自分の生まれ年(したがって年齢も)さ

え知らなかったのである(蛇足ながら、戸籍とは世界でも、日本、韓国、台湾等に限られている)。

それでは、日本は島国ゆえ、“ボーダー”も明確だろうか? なるほど、アフリカよりよほどわかりやすそうだが、中心(都)を離れて周縁になるほど曖昧なのは同じかもしれない。朝廷/幕府を中心とした政治体制は、「まつろわぬ夷ども」をも中心からの構造に誘い込み、ボーダーを確定していくことで、隣接する近代国家間にあいまいな地帯=政治的空白を解消していったわけである(バートン、2001)。

周縁からの視点では、それは“夷”等のラベル付けによる等級化であり、“国境”という名目で自由な動きが制限されていく過程である(モーリス・スズキ、2003)。江戸時代、山丹貿易の形でアイヌの人たちの手を經由してもたらされた“蝦夷錦”や、琉球を軸に清朝と交わされていた冊封体制での貿易が、明治以降の近代化で消えていったことを思い起こせば良いだろう。逆に、植民地時代に引かれたボーダーで人工的にできあがった国家が、国民国家に成長できぬまま解体した例がインドとパキスタン、そしてバングラデッシュ、あるいはそして先程も触れたエチオピアとエリトリアである(宮本・松田、1997)。

Ⅲ-2. 民族とは何で決まったのか?

先に述べたように、“人種”とは統計的な生物学的概念であり、今日、他者から隔絶した“人種”など存在しないことをのべた。それでは、“民族”は実体を持つだろうか?

民族は「文化の伝統を共有することによって歴史的に形成され、同属意識をもつ人々の集団」とされている(『広辞苑』第四版)。一般的には、言語=文化の基本の共有が民族の形成に書かせない条件である。とは言え、現実には簡単ではない。例えば、“ユダヤ民族”では、ヘブライ語やイディッシュ語等、多数の言語が母語になっている。ユダ

や民族は単一の人種／民族ではなく、むしろユダヤ教という宗教で結びついた社会集団と言うべきかもしれない。

アフリカでは、植民地時代に先住民を“部族”に分割したが、その“部族”は必ずしも実態をともなったものではなく、植民地政府の恣意的な措置であった場合も多い(宮本・松田、1997)。ところが、その“部族”がいつしか政治／社会的実態をもち、“部族主義(トライバリズム)”を助長させ、“民族／部族紛争”に発展した例も少なくない。植民地政府がしばしば採用した“分割統治”は、“集団”に“実体性”をもたらし、政治集団として再編成して、結果として紛争や戦争の原因となったのである(ピアフラ戦争等)。

それでは、実在する“民族”に触れてみよう。私が3年間ほどつきあっていたトングウェという人たちは、西部タンザニアのマハレ山塊国立公園の周辺、2万平方キロばかりのトングウェ・ランドに2万人ほどが住んでいる。なお、彼らはコンゴ・コルドファン語族のニャムウェジ語系トングウェ語を話しているが、こうした弱小語は共通語(タンザニアではスワヒリ語)の普及(学校教育およびラジオ放送)で消滅の危機にある。

それでは、トングウェの人々は何時からトングウェなのだろうか？ この地で40年近くチンパンジーを研究してきた西田利貞は調査初期に、書き言葉を持たず、伝承世界に生きている彼らから聞き込みをおこなった(西田、1973)。彼らは父系をたどるとおよそ7、8世代、つまり150～200年ほど前の祖先までを遡る。そして、祖先はすべて対岸のコンゴ出身者に行きあたる。しかも、複数の民族出身なのである。それ以上は推測でしかないが、複数の民族の出身者が何らかの理由で湖を移動し、紛争と融合をくり返しながら一つの民族を創出する。このように民族は語られぬ歴史の中で、次々に生まれてはまた変わっていく存在なのである(宮本・松田、1997)。それが“部族”という名称

で固定化・分類され、やがて“部族対立”や“民族紛争”に発展していったことが、アフリカの近代化の一断面にほかならない。

Ⅲ-3. 国家という幻想

近代国家とは、大革命後に成立した“国民国家(ネーション・ステーツ)”としてのフランスと、政治的思想をバックにした契約国家であるアメリカ合衆国をあげるべきだろう。後者は特殊に過ぎるので、前者のフランスであるが、歴史を少しさかのぼれば文化的にも政治的にも単一国家とは言えないものだったことがわかる。現在フランスと呼ばれている地域は、フランス王国の他、ブルゴーニュ公国、ブルターニュ公国、ナバル王国など多くの政治権力に分かれていた。こうした“小国家”や“地方文化”を“坩堝”に溶かし込んで“フランス民族”を形成したのが、“フランス革命”の最大の成果なのだ。もちろん、ナポレオン戦争で倒れた100万人を筆頭に、膨大な人命の犠牲の上になりたっているのだが。

それでは、アフリカで成立している国家とは？ 1885年のベルリン会議等で人工的に分割された植民地は、そのままの形で独立の日を迎えた。そのため、ほとんどが複数民族によるモザイク国家でナショナル・アイデンティティは稀薄か、存在しない(砂野、1997；池野・戸田、1997)。ネーション・ビルディングとは、そうした状況下で近代的国民を創生することにほかならない。しかし、1967年からのピアフラ戦争、ソマリア(氏族社会への回帰)、コンゴ(統治機構の地域的分解)、エリトリア(宗教等の理由から国家分裂)、ブルンディ・ルワンダ(“民族”間の対立)等、国民的統合(ナショナル・インテグレーション)の進行どころか、国民解体(ナショナル・ディスインテグレーション)的な現象が多く見られている。

そんななかで、タンザニアはネーション・ビルディングにかなり成功した国といえるだろうと

というのが、私の実感である。タンザニアは120の民族に分かれ、ザンジバル島のオマーン系スルタン政権を除けば、19世紀のドイツによる植民地化前に、統一された政治勢力はなかった。しかし、1961年の独立、1963年のザンジバルとの統合を経て、スワヒリ文化というクレオール語を基本とした文化が普及していたこともあり、国家的アイデンティティの醸成に成功しているようだ。

Ⅳ. 最後に「ボーダー」を「超える」ために

さて、そろそろ初めの問いに立ち返る時が来たようだ。ボーダーとは何か、そしてその意味は？動物行動学の創り手の一人でノーベル賞受賞者のN・ティンバーゲンは、ある行動を進化論的に議論する際、4つのレベルがあると指摘した。まず、①行為のメカニズム、②その行為をどうやって身につけたかという発達、③の行為が果たしている機能的役割、そして④進化の中で「ボーダー」が進化した究極的理由である。こうした考え方は、ヒトの人間の社会行動でも十分に適用できる(マーティン・ベイトソン、1990)。

ではなぜ、自他を区別しなければならないのか？ありていに言ってしまうと、生物の生存と再生産において、自他の識別は必然でもある。「自他の識別／認識」は、種によっては遺伝子に組み込まれたり(たとえば、昆虫類)、ヒトのように後天的な学習に依存したりする。アンシクロペディストたち、あるいはその後継者としての近代科学はその区別をさらに延長することで、世界を理解・支配しようとしてきただけなのである。

繰り返しになるが、問題はこうした自他の区別に多くは無意識のうちに「価値観」が紛れ込むこと、そしてその価値観が「不寛容」に結び付きがちなことである。「自らの価値観」を疑いもせず、「他者の価値観」を認めない「排除の原理」がしばしば顔をのぞかせる。さらに、「価値観」には無意識の

うちに方向性が忍び込む。「欧米」、「国際」等は後光がさすかのように受け取られる。「外人」といえば「ヨーロッパ系」の遺伝的体質をもつ人を連想するだろう。かつてアンシクロペディストは「世界を知る＝世界を支配する」ために、「知識」をボーダーにそって刈り込んだが、その結果はむしろ「自己をだまし、他者に対して眼と心を閉ざす」結果に墮しているとも言えないわけではない。

さて、20世紀も後半以降、未曾有の発達を示している近代科学のなかで、もし希望を探そうとすれば、それは「共生」と「多様性」の概念かもしれない。種も社会も、個も独りでは生存できるわけもなく、自他を含めた「環境」との相互作用のなかで絶えず最適条件を求めながら揺れ動く。かつ、その環境はヒトの手が過度に加われば多様性を失い、ヒト自身の生存にとっても似つかわしくないものになりかねない。こうして、共生と多様性は、ヒトと自然の関係だけではなく、ヒトとヒトの間においてもボーダーを超えたつながりを保つために、欠かすことができないキーワードとなってきている。

とはいえ、このキーワードのどちらも軽々しく口に出すことにためらいを感じてしまうのも事実だ。生物にとって「共生」とは、長い進化の歴史のなかで搾取や寄生のなかから辛うじて創り上げられた状態であり、進化がさらに進めば打ち捨てられかねない、あやうい均衡状態なのである。また、「多様性」が豊かなことが当事者すべてに「絶対的な幸福」をもたらすものなのかどうか、理論的根拠は曖昧なままだ。共存にはそれなりのコストがかかり、しかもなおかつ絶えずモニタリングしながら、自発的・内発的に維持していくことが真の意味での「市民」のあり方であろう。

近代的社会システムは従来、ボーダーをはみ出す者たちを「ごみ箱」に捨てることで自らの存続を図ってきた。フーコーが指摘する監獄、精神病院、流刑地、難民キャンプ、ゲットー等、多くの装置

Y. Takahata, Several Discussions on Border and Cross-border

がそれなりに社会的機能を果たしてきたわけである。しかし、地球上にこのような“都合の良い”ごみ箱を置く余裕はもはやなさそうである。それは、ちょうど地球環境問題において我々の生活から出る排出物／廃棄物の処分スペースがなくなっているのと同様だろう。このように、現在、我々に対して、“共生”と“多様性”をキーワードとした新たなシステムの構築が求められているのである。

最後に、この文章は、実は、2003年に逝去された故安保則夫関西学院大学総合政策学部教授からのご依頼で認めたものである。先生がお亡くなりになったことで、いわば宙に浮いてしまったものであり、かつ主題は必ずしも私の専門ではない。議論の多くも未熟なままであることは否めないが、『総合政策研究』に掲載することで、安保先生のご遺志に少しでもそうことを念じて、ここに投稿するものである。

引用文献

- アリエス、A. 1980『<子供>の誕生』(杉山光信・杉山恵美子訳)みすず書店。
- バートン、B. 2001『国境の誕生』日本放送出版協会。
- バリー、J. M. 1972『ピーターパンとウェンディ』(石井桃子訳)福音館書店。
- ダントン、R. 1986『知識の系統樹を刈り整える哲学者たち』『猫の大虐殺』(海保真男・鷲見洋一訳)岩波書店、pp.241-273。
- デイドロ、D. 1953『ブーガンヴィル航海記補遺』(浜田泰佑訳)岩波書店。
- フーコー、M. 1974『言葉と物』(渡辺一民・佐々木明訳)新潮社。
- フレーザー、A. 2002『ジプシー 民族の歴史と文化』(水谷驥訳)平凡社。
- 比屋根照男、2003『「混成的国家」への道－近代沖縄からの視点』『日本の歴史25巻・日本はどこへ行くのか』講談社、pp.143-192。
- 本多勝一、1967『極限の民族』朝日新聞社。
- 伊谷純一郎、1996『森林彷徨』東京大学出版会。
- 池野旬・戸田真紀子『独立の光と影』宮本正興・松田素二編『新書アフリカ史』講談社、pp.471-507。
- 岩崎奈緒子、2003『<歴史>とアイヌ』『日本の歴史25巻・日本はどこへ行くのか』講談社、pp.193-232。
- レヴィ＝ストロース、C. 1976『野生の思考』(大橋保夫訳)みすず書房
- Lewontin, R., 1995. Human Diversity, Scientific American Books, New York.
- マーティン、P. P. バイトソン、1990『行動研究入門』(粕谷英一他訳)東海大学出版会。
- 宮本正興・松田素二編『新書アフリカ史』講談社。
- テッサ・モーリス＝スズキ、2003『マイノリティと国民国家の未来』『日本の歴史25巻・日本はどこへ行くのか』講談社、pp.101-142。
- 西田利貞、1973『精霊の子供たち』筑摩書房。
- サイード、E. W. 1986『オリエンタリズム』(今沢紀子訳)平凡社。
- 坂本賢三、1985『分類』『平凡社大百科事典13巻』平凡社、pp.398～399。
- 砂野幸稔、1997『パン・アフリカニズムとナショナリズム』宮本正興・松田素二編『新書アフリカ史』講談社、pp.445-470。